

[研究論文]

需給関係の狭間で揺れ動く インドネシアのジハード暴力運動

河野 毅 (本学 国際社会学部 教授)

1 はじめに

テロは心理的暴力である。テロという心理戦争を仕掛けることで、不特定多数のターゲット社会に恐怖を流布することができる。いつ何かどこで起こるかかわからない、という恐怖を日常に植えつけることで、その成功の度合いを測ることができる。その意味で、2001年に発生したアル・カーイダによる米国での同時多発テロは、標的となった米国始め国際社会を震撼させ、恐怖を日常に植え付けることに成功した。このテロの首謀者オサマ・ビン・ラディンは、世界のイスラム教徒に対し、西欧によるイスラムの暴力的抑圧に対抗するため今こそ米国主導のイスラム攻撃に対抗するジハード（聖戦）という神に従う暴力で対抗しなければならない、というとても分かり易い暴力の正当性を広めたリーダーだった¹。しかし、そのリーダーは2011年5月まで逃亡の日々を続け、その最後は、少人数の家族と質素な生活を強いられ、パキスタン首都近郊のアジトに潜伏中に、米国特殊部隊に射殺されるという惨めなものだった²。オサマ・ビン・ラディン自身が夢見た「十字軍から解放されたイスラム世界の実現」は実現しなかった。オサマ・ビン・ラディンの死亡後、アル・カーイダがその後継者を選ぶために6週間もかかったことが、既にアル・カーイダという組織の斜陽を物語った。米国がリード

する対テロ同盟諸国は、アフガニスタンからアル・カーイダを追放し、イラクを侵略し、中東各地にある軍事基地を更に強化し、「テロとの戦い」の標語の下で成長した軍事、情報産業は急成長した。ただ、グローバルにジハードを推進するアル・カーイダの戦略は頓挫したが、現在では地域に根付いたジハード暴力集団が乱立している。

確かにローカルな環境に合わせたジハード暴力は根強く継続している³。それは、2011年から不安定化したアラブ地域の政情が追い風となり、アルジェリア、リビア、エジプト、ソマリア、ナイジェリア、イエメン、シリア、パキスタン、アフガニスタン、そして2013年以降イラクのシーア派とスンニー派の対立とシリア内戦で生まれた権力の空白から急成長したいわゆる「イスラム国」のジハード暴力である。そのローカルなジハード暴力は、その政治、経済、社会環境の下で、ヒト、モノ、カネ、をジハードというイスラム教の理論で結合させた暴力運動であり、その暴力手法は、一般社会に心理的ショックを与えるテロという手法を使うことが多い。その政治的目標は、一つの領域で、イスラムの教えに基づいた政治的な権威を確立し、国民国家とは違う、イスラム教義に基づいた「カリフ制」という政治・社会・経済制度の樹立を究極目的としている。そしてジハード暴力集団は、国家集団と同じく、サイバー・スペースを心理的武器として広報、リクルート、脅迫に最大限活用している。

本稿のテーマであるインドネシアも、ローカルなジハード暴力にさらされている。それは、カリフ制の樹立という究極目標のために、運動の拠点となる地域をまず支配すること、そして国民国家という政治ユニットを超えたカリフ制樹立の目標で連動した国境を越えたジハード運動を起こすこと、そのためには、シリアやイラクで起こるジハード暴力に注意を払い、情報共有し、時には支援にはせ参じる、そして、カリフ制樹立に障害となる欧米権益やインドネシア政府をテロという手法で攻撃する、という状況が発生している。

2 テロの手法と需給関係

では、テロという手法をどのように理解すればいいのか。本稿では、テロという行為は、ジハード暴力運動の一つの手法として理解することとする。そのため本稿では、社会運動論で議論されている「需要」、「供給」というコンセプトを利用してみる⁴。本稿で指す需要とは、テロを容認する社会心理的環境であり、それは、欧米に対する反感、怒り、イスラムの敵とされる社会への逆襲への欲求、その感情の喚起、過去の栄誉とカリフ制へのノスタルジア、抑圧されるイスラム教徒への同情心など、ジハード暴力運動を正当化できる社会心理的環境である。一方、供給とは、実際にジハード暴力を実行する組織的基盤であり、いわゆるテロ・ネットワークである。この組織的基盤には、過激イスラム導師、テロのリーダーとその実行メンバーがおり、特に重要なのはジハード暴力を正当化するための組織としてのアピールをする努力である。そのアピールの強化のために、過激イスラム導師は聖典を引用してジハードの必要性を説き続け、インターネットを通じ広報をすることになる。同時にテロのリーダーは、目的達成のためにどの標的をどのタイミングで攻撃するか、そのインパクトは何か、など戦略的な判断をすることになる。このようなネットワークを維持して拡大する努力は、テロという手法を使って行うジハードの需要と供給を上手く繋げるための、ジハード暴力集団による運動の努力なのである。その運動の強化（ネットワークの拡大）のためには、ジハードを支持する社会に対する臨機応変で効果的な説得力と社会のコンセンサスが必要である。それは、まるで需給関係のなかで物品の価格が決まるまでに広告効果が影響するように、社会心理的環境（需要）を利用して、テロという手法を通じテロ・ネットワーク（供給）を拡大し、ジハード暴力運動が政治的目的を達成できるようにするために必要な暴力運動による努力である。よって、需給関係が成立するため

には、ジハード暴力運動の主体（供給側）がテロという手法を通じ社会（需要側）にアピールし、ジハードを支持する社会から更なるコンセンサスを引き出し、ジハードの対象となる社会（敵）には恐怖を流布し屈服させることを目標とする。

3 東南アジアのテロ事件数：インドネシアに多いジハード暴力集団によるテロ

全体総数からみる東南アジア地域のテロ事件数は、フィリピンとタイのテロ事件数が圧倒的におおい。情報源を現地報道に頼る米国メリーランド大学のグローバル・テロリズム・データベース（start.umd.edu）によると、2000年1月から2015年12月までの間に東南アジア地域で発生したテロ件数7,239件であるが、その大部分である6,170件はタイとフィリピンで起こっている（ちなみに全世界数は87,009件）。うち、タイの3,112件のほとんどは、タイ南部の分離主義運動による小規模のゲリラ攻撃によるものであり、99%が死者を出さなかった、または一桁の死者を出した爆破事件など小規模のテロ事件である。フィリピンでは3,558件のテロ件数が報告されている。内訳をみるとその91%は中央政府と対立する反政府グループ（新人民軍、ミンダナオを拠点とするモロ民族解放戦線）による事件である。全体のうちイスラム過激派グループによるものは360件で、2010年以降は誘拐事件が増加している。

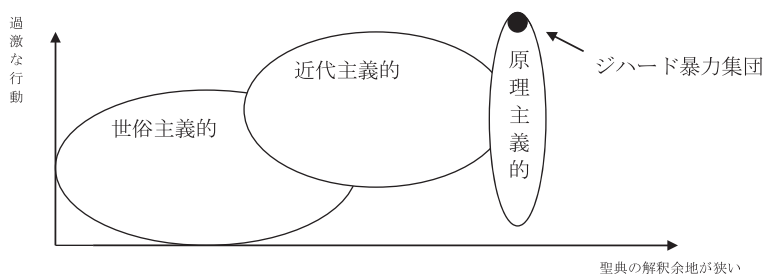
他、テロ件数では、インドネシアは500件、マレーシアは39件、である。このデータは報道をもとに作られているためその正確性には疑問が残るとしても、東南アジア全体の傾向としては、タイとフィリピンのように、分離主義運動を主体とした反政府テロ事件が多いことがわかる。インドネシアの死者数をみても、約95%が死者数の報告がなかったか、1～10名の死者数が報告された小規模のテロ件数である。しかしながら、

需給関係の狭間で揺れ動くインドネシアのジハード暴力運動

インドネシアのデータで目を引くのは11～50名の死者数を出したテロ件数が11件と比較的多く（全体の2.5%）、同時に200名以上の死者を出した事件が1度起こっていることであり（2002年10月のバリ島における連続テロ事件）、かつ、このように多くの死者を出すテロ事件はジハード暴力集団が強力な爆弾を使った結果である。さらに、全体のテロ事件の実行犯を調べると、全体の49%はジハード暴力集団によるものであり、アチェ州、パプア州を拠点とする分離主義運動による反政府テロ事件は121件に止まっている。

4 需要：4つのイスラムの潮流

ここでジハード暴力集団の位置づけと上記で説明した需要の部分を確認するために、イスラムの社会勢力の概観を説明しておきたい。筆者が2005年に提示した説明をもとに本稿では以下の図にある4つの勢力を提案する⁵。



この図で縦軸は過激な行動であるかを示す。上へ行くほど行動は過激となり、究極的には斬首、爆弾攻撃などの殺害行為となる。横軸は聖典の解釈の余地の度合いを示しており、右へ行くほど聖典に書かれている文言をそのまま実行することとなる（解釈の余地が狭い）。ジハード暴力

集団は、究極的な行動を惜しまず、且つ、聖典の解釈の余地を認めない。

第1は、世俗主義グループである。このグループは、政教分離と民主選挙を容認し、選挙に積極的に参加する。同時に、ナショナリズムの意識が強く（国民国家を受け入れている）、欧米に追いつこうという競争心がある。このナショナリズムは、植民地主義を経験して独立国家となった歴史的なプライドから来る。よって、自国は欧米と競合関係にあると考えているので、決して反欧米ではないが、欧米の行いには常に疑いを持ってみる。さらに、世俗的法体系を受け入れ、同時にイスラム法（シャリーア）は社会道徳の規範として理解しているのでシャリーアの法制化にはこだわらないため、カリフ（預言者の代理人）による施政にもこだわらない。また、イスラム教には地域性があるのが当然であると考えるのでイスラム教義をアラブ地域に頼るイスラム原理主義には反対である。その世界観は自らの国家を超えることはなく、住居する地域に規定されるため、遠い中東地域の国際ニュースに対して敏感に反応しない。このグループはインドネシアでは闘争民主党、ゴルカル党などの世俗的な政党に所属するイスラム教徒であり、加えてインドネシア最大のイスラム社会集団ナフダトゥール・ウラマ（NU）など土着宗教の影響を受けたイスラム教を信じるイスラム教徒を指す。マレーシアでは、与党政権を担ってきた統一マレー国民組織（UMNO）であるが、UMNOは原理主義的な野党全マレーシア・イスラム党（PAS）との競争の結果、自らをイスラム化させる傾向があるが（上図で右より）、その本質は民族的世俗グループである。その理由は、マレー民族主義がイスラム・アイデンティティーよりも優位にあることに加え、華僑が3割以上を占めるマレーシア社会ではイスラム化は非常に難しいという現実が世俗化を維持しているからである。フィリピンでは、モロ民族解放戦線（MNLF）の一部にこの傾向が見られる。このグループは、フィリピン政府からの独立をめざすミンダナオ島に拠点を置くモロ民族グ

ループである。MNLFは、以下に述べる近代主義、原理主義グループのモロ・イスラム解放戦線(MILF)と1977年に分裂している。

第2のグループは、近代主義グループである。近代主義というのは、欧米の産業革命の波(近代科学の発展の結果)を感じた中東のイスラム団体が始めた近代イスラム改革運動がその謂れの根源である。この運動は、西欧の近代主義の挑戦を受け止め、それまで西欧化という思想的に「穢れた」イスラムを洗淨しようとして聖典の本来の精神を回復しつつ近代化を進めるために科学教育を積極的に受け入れるグループである。このグループは、イスラムの価値を最上に考えており、同時に西欧とは競争関係にあると考えているので、民族的世俗グループと同じく欧米に対して競争心を持つ。また、一部の急進的な近代主義者は欧米の圧倒的な経済成長の裏にはイスラム社会の欧米による植民地化(例えばアラブ地域の石油資源の搾取)があるとして欧米を敵視する。同時に、このグループは代議制度を容認し、積極的に政党をして民主的選挙に参加する。よって、国民国家の存在を認める。しかし、政教分離の原則については、イスラム道徳と規範を至上と考えるため、曖昧な態度をとり、現世の社会問題を解決できる政治システムとしてカリフ制の有用性を認めるが、既存の国民国家の枠内で認めている。また、世界観と価値観に強く影響するのはイスラム教であり、国境を超えるイスラム同胞への連帯意識が強いため、このグループはイスラム諸国の国際的なニュース(例えばパレスチナ問題)には敏感に反応する。インドネシアではムハマディアという第2のイスラム社会団体であり、マレーシアではマレーシア・イスラム青年運動(ABIM)に代表されるダッワ(布教)運動の母体である。このグループは、科学教育に重点を置いた教育に非常に熱心であり、社会福祉運動の一環としてイスラムに基づいた学校の設立、金融機関(イスラム銀行や組合)の設立をしている。インドネシアのムハマディアや、マレーシアのABIMは、教育レベルも高く、国際的視野も広いため、

イスラム教徒が多数派を占める両国では、多くのリーダーを輩出している。一方、イスラム教徒が少数派であるフィリピンでは、前出のモロ・イスラム解放戦線（MILF）の一部がこのグループに属するが、反政府運動であるため、国家権力から遠く、その社会的な地位は低い。

第3のグループは原理主義グループである。インドネシアとマレーシアでは中東から広まった解放党（ヒズブット・タフリル）がこのグループの典型である。このグループは、イスラムの清浄を突き詰め、聖典の教えを字面で理解することに努力し、教義の解釈には余地を与えない。このグループは、イスラムの至上を信じているので、西欧文明の発展を否定する。例えば、代議制は民意を反映させるシステムでありこの民意そのものには常に間違いが伴うので、全能の神のもとの正しい統治システムに成らないため拒否している。よって、神による統治を実現するために預言者の代理人であるカリフをリーダーとしイスラム法学者から構成される最高評議会となど賢人会が神の意志を反映して社会を統治するべきであると考えるグループである。このグループの大多数は暴力に走らないが、自らが住居する国家に対する忠誠心はなく、その世界観と価値観は、全能の神のもとつくられるイスラムの世界観に規定される。このようにイスラム世界で繋がっている世界観を持つ結果、海の彼方のイスラム同胞に対する心理的、感情的なつながりは強く、例えばパレスチナで起こるイスラム教徒の惨事をまるで自らの惨事のように捉え、支援に乗り出す。カリフ制実現のための方法は、布教活動を通じ中心となる家族共同体（ウスロ）を作りその共同体を無数に設立させることで拡大していき、結果カリフのもとで賢人会を作り、既存の政府に取って代わるといった基本的には非暴力な方法である。

第4のグループは、本稿の主題であるジハード暴力集団である。ジハード暴力集団は原理主義グループの一部であり、その行動様式は基本的に原理主義グループと同じであるが、カリフ制樹立のためには人命を狙う

爆弾テロ、斬首や誘拐も辞さないところが大きな特徴である。ジハード暴力集団は、西欧と近代化への嫌悪と怒り、それに代わるべきイスラム道徳の確立とカリフ制の樹立という精神に、暴力による政治目的の達成という手法を組み合わせている。このグループは、過激イスラム導師、テロのリーダーとそのメンバーで構成されており、過激イスラム導師は直接暴力行為には参加しないため刑法による処罰は不可能ではないが困難である。テロのリーダーは、アフガニスタンでソ連と闘った経験や、現在では中東の紛争（現在ではシリアとイラク内戦）で戦闘を経験した人物が多い。ただ、このグループは、上述の第1、第2グループの多数派のイスラム教徒がテロという手法を支持しないため、暴力を通じて達成すべき政治制度の正当性を実証できない（カリフ制を成功させているイスラム国家が不在）という政治ジレンマを抱えるため、過激イスラム導師が唱えるカリフ制の理想に頼ることとなる。このグループには、既に解体したインドネシアのジャマ・イスラミヤ（とその分派）、フィリピンのMILFの一部、同じくフィリピンのアブ・サヤフ・グループなどがある。ただし、ジハード暴力集団には、後述するように、カリフ制樹立のための方法論で差があるため、一枚岩ではない。

5 ジハードの舞台としてのインドネシア

オサマ・ビン・ラディンのようなジハード暴力集団のリーダーにとって、イスラム教徒を抑圧してきたスハルト政権崩壊後のインドネシアはイスラム教徒の解放のための格好の戦場だった。スハルト政権の32年にわたる抑圧に耐えてきたイスラム教徒を1998年のスハルト退陣とともに解放することは、ジハードの重要な目的である。戦略的には、インドネシア、マレーシア、フィリピンの南部からアフガン戦争の経験者を組織し直すことは、この地域が東南アジアにおけるイスラム国家樹立の

ための重要拠点が可能になることを意味した。さらに、アチェ、マルク、ポソ、パプアなどのインドネシア各地で地域紛争が起こった状況は、アル・カーイダにとって潜入しやすい環境であった。また、歴史的にもインドネシアではカリフ制樹立を目指したダルル・イスラム運動があった経緯があるため、その運動を再起し、この運動とアル・カーイダとの連携をすることが格好の目的となった。

東南アジアのジハード暴力を担ったのは、ジャマ・イスラミヤ（以下JI）だった。JIは、その2007年の分裂までは、東南アジア最大のジハード暴力集団として、規模の大きい連続爆弾テロ事件を数々起こした。主なものでも、2000年にインドネシア各地のキリスト教会を次々に爆破したテロから始まり、2002年にはバリ島で202名の死者を出した連続爆破事件、2003年にはジャカルタのマリオット・ホテルを爆破（12名死亡）、2004年には在インドネシア豪州大使館を爆破（9名死亡）、2005年に再度バリ島で発生した爆破テロ（20名死亡）がある。

6 供給：ジャマ・イスラミヤの設立

ジャマ・イスラミヤ（後JI）は1993年1月に2名のインドネシア人イスラム導師アブドゥーラ・スンカル（Abudullah Sungkar）とアブ・バカル・バアシール（Abu Bakar Ba'asyir）によって逃亡先のマレーシアで設立された⁶。JI設立の目的は、唯一神（アッラー）だけに従うイスラム国家を東南アジア地域に創るために、「不信心者」達と戦う世界のイスラム同胞と協力してジハードを実行する（戦う）組織である⁷。したがって、JIは、当初から、イスラム国家樹立の目的のために、イスラム教を軸とした国際的な闘争ネットワークを持つという団体として設立されている。その闘争方法については、この公式声明文によると、武装闘争（Jihad fi Sabilillah）と布教活動（ダッワ）の2つの柱からな

るが、この方法論をめぐって、その後 JI はいくつかのグループに分裂していく。2002 年のバリ島における連続爆弾テロ事件の首謀者達は欧米を標的とする武装闘争に重点を置き実力行使に出たが、一方、欧米に対する武装闘争に賛成しない JI メンバーはインドネシア国内で強固な闘争拠点を作ることに重点をおく JI の将来を主張した。

JI の創立者アブドゥーラ・スンカル導師は、1937 年に中部ジャワ州ソロ市生まれのイエメン系インドネシア人である。99 年インドネシアに帰国後、同年 11 月に心臓病で死亡した。バアシール導師は、スンカル導師とともに中部ジャワ州ソロ市にあるアル・ムクミン寄宿塾 (Pesantren al-Mukmin, 別名「グルキ寄宿塾 (Pondok Ngruki)」) を設立し、急進的なイスラム寄宿塾教育をおこない、スハルト政権下では 78 年に反逆罪の疑いで逮捕されている。85 年にはスハルト政権下の抑圧を逃れる形でスンカル導師とバアシール導師は共にマレーシアに逃亡し (ムクミン寄宿塾は存続)、逃亡先のマレーシアで布教活動を活発に行った。85 年からのマレーシアにおける生活の状況は必ずしも明らかではないが、マレーシアのジョホール州で 1991 年に中部ジャワのアル・ムクミン寄宿塾をまねた「ルクマヌル・ハキム寄宿塾 (Pesantren Lukmanul Hakiem)」を設立し、ジハード教育を進め、ジハード暴力を担った卒業生を輩出した。例えば、ルクマヌル寄宿塾の塾長は、2002 年 10 月のバリ島における連続爆弾テロ事件の主犯格であるアリ・グフロン (別名ムクラス) であった。

7 JI 後のジハード暴力運動

バアシール導師は、公には JI との関与を認めないが、亡命先のマレーシアからスハルト政権崩壊後に帰国してからは、実質 JI の過激イスラム導師として、アル・ムクミン寄宿塾を拠点にジハードの必要性を訴え

る布教活動をした。が、2004年に、2003年に発生したジャカルタのマリオット・ホテル爆破事件の関与の疑いで逮捕され、2005年3月に2年半の実刑判決を受けた。が、大統領恩赦の結果、2006年6月に実刑より4ヶ月少なく釈放され、アル・ムクミン寄宿塾を拠点に活動を再開した。

同時に、JI内では、欧米を標的とする爆弾テロはジハードとして継続するべきであるというグループと、まずはインドネシア国内で安全な闘争拠点 (qoidah aminah) を作り、そこから欧米に対するジハードを実行するべきである、という違った方法論を主張するグループに分裂していった。前者は、ヌルディン・モハマド・トップを中心にした「個人中心のジハード (jihad fardiyah)」を主張するグループで、2009年のジャカルタにあるマリオット・ホテルとリッツカールトン・ホテルの連続爆破事件を起こすこととなる。後者はアフマッド・ロイハン、ハムザ、ナッシール・アバスを中心とするグループで、ジハードはまずは安全な闘争拠点をスラウェシ島のポソ市地域に求め、ポソで現地警察などを襲撃したり、キリスト教徒の女子高校生を斬首するなど暴力闘争にでたが、これが住民の支持を獲得せず当局の捜査が強化されると、スマトラ島のアチェ州にその拠点を求めた⁸。

一方、バアシール導師は、2008年には、地下組織であったJIに代わる組織として、ジャマ・アンシャルット・タウヒッド (Jama'ah Ansharut Tauhid, JAT) を公の組織として設立した。その目的は、ジハード暴力集団の公な結集であり、上記JIの分裂を受けて考えられたジハード運動の存続対策だった。その2008年9月17日のジャカルタ近郊での決起集会には、バアシール導師のムクミン寄宿塾の卒業生のほか、JIの一部メンバーも参加した。例えば、爆弾テロ実行犯として実刑後釈放されたルートフィ・ハエダロ (別名ウベイド) は欧米権益を狙う爆弾テロによるジハードを推し進めるヌルディン・トップの側近だがJATに

メンバーとして参加し、バアシール導師が実は個人中心ジハードのリーダーで逃亡中のヌルディン・トップのグループと関係していることを匂わせた。さらに、この決起集会にはジハード理論家でアラビア語から過激な文書をインドネシア語に翻訳することに長けているアマン・アブドラフマンがいた。アマン・アブドラフマンは、2004年にジャカルタ近郊のアジトで爆弾製作中に誤爆したところに居合わせたためテロ容疑で逮捕され実刑判決をうけたが、JATの決起集会直前に釈放されていた⁹。JATの教えでは、布教とジハードの一体化を強調しており、エジプトの過激イスラム理論家であるサイド・クトゥブを引用しつつ、イスラム教徒としての責任であるジハードは布教活動と分けることはできず、それはまるで心と体を分けることができないことと同じであると述べる¹⁰。

JATの設立というジハード・グループ結集の運動努力は、欧米権益に対する直接攻撃を進めるグループと、まずはインドネシア国内で安全な闘争拠点を作りそこから欧米に対するジハードを実行するべきと考える2つのグループの溝を埋めることはできなかった。まず、欧米権益への直接攻撃を進める個人中心ジハードのリーダーであるヌルディン・トップのグループは前述したとおり2009年7月にジャカルタにあるマリオット・ホテル（2003年に続き2度目）とリッツカールトン・ホテルの連続自爆テロに成功する。この連続爆破テロでは9名の死者（うち6名が外国人）を出し、53名が負傷した。警察は、この自爆テロの捜査の結果、同じグループによるユドヨノ大統領暗殺計画が進んでいたことを知る。しかし、その2ヵ月後、2名の自爆テロ犯の捜査を進めた警察は、テロ・リーダーであるヌルディン・トップを中部ジャワで発見し、その場で射殺した。

一方、安全な闘争拠点作りを目指すグループは、2002年10月のバリにおける連続爆破事件で指名手配を受けていたドゥルマティン（別名

ジョコ・ピノト)を中心に、アチェ州でその拠点作りを目指した。その拠点は、前出のアマン・アブドラフマンが理論的支柱としたヨルダン人過激イスラム導師アブ・ムハマッド・アル・マクディシ(同人は一時拘束されたが2014年6月にヨルダン政府が釈放している)が主張するイスラム法の完全施行をできる地域、である必要があった。過激イスラム導師の役割を負うアマン・アブドラフマンは、アチェ州はイスラム法の完全施行をできる地域であると考えた。一方、ドゥルマティンは、アチェ州はイスラム主義を掲げる分離主義運動が継続するタイ南部とも近く、すでに解体したJIと活動拠点を失った他のジハード暴力集団(KOPMAK)を統合できる拠点と考えた¹¹。

2009年には、アチェ州に在住する過激イスラム導師を伝に、このグループはJAT、JI、KOMPAK等から、最終的には約200名のジハード暴力メンバーを集め、同州大アチェ県ジャント郡で軍事訓練キャンプを設置した。ところが、このキャンプの存在と武装勢力が、現地住民と警察の知るところとなり、2010年2月末から警察と軍による強制捜査が始まり、このグループのネットワークがアチェを拠点に北スマトラ、ジャカルタ、西ジャワ、中部ジャワ、スラウェシ(ポソ市付近)と広範に広がる全国ネットワークであったことが判明した¹²。同年3月には、このアチェでの軍事訓練を支援した容疑でアマン・アブドラフマンが逮捕され、12月にはバアシール導師が逮捕されている(2011年に懲役15年の実刑判決を受け受刑中)。

アチェ州をジハードの拠点として利用しようとしたジハード暴力集団の運動は失敗した。それは、ジハード暴力集団の供給としての軍事訓練拠点は、アチェの需要に合わなかったことを意味した。このドゥルマティンとアマン・アブドラフマン以下ジハード暴力グループは、アチェは歴史的に反植民地主義(反オランダ、反ジャカルタ)を掲げたナショナリズムの強い地域でありイスラム過激派が標榜する反欧米とは違う

ことを理解していなかった。約 200 名もの逮捕者を出したこの運動の努力はアチェの一般住民から支持されなかったのである¹³。

ところが、「個人中心のジハード」は継続した。その理論的な背景としては、アブ・ムサッブ・アル・スリ（シリア生まれのジハード理論家）が主張する、個別の分子がそれぞれできる範囲でジハードを実行することで西欧を打ち倒す主張が、インドネシア語に翻訳され 2009 年に出版されており、この書籍はジハード暴力グループの間で幅広く受け入れられている¹⁴。アブ・ムサッブは、欧米打倒のためにはアル・カーイダのように上下関係の強い組織を作ることに反対し、ジハードは個人が住居する社会でそれぞれ欧米に攻撃を仕掛けることを主張したことで知られる¹⁵。アチェでの摘発後にインドネシアで起こった個人中心のジハードの主な例としては、北スマトラでの警察襲撃（2010 年 9 月）、ジャカルタでの書店爆破事件（2011 年 3 月）、中部ジャワ・チレボン市の警察に対する自爆攻撃事件（2011 年 4 月）、バリ島爆破未遂事件（2012 年 3 月）、中部ジャワ警察襲撃事件（2012 年 8 月）、ジャカルタ近郊のデポック市での爆破事件（2012 年 9 月）、ジャカルタでの警察襲撃事件（2013 年 8 月に 2 回）がある。この他、ジハード資金獲得のための銀行強盗は北スマトラ（2010 年 8 月）、西ジャワ（2012 年に 3 回）、西ジャワと中部ジャワ（2013 年に 6 回）発生している¹⁶。2002 年のバリ島における連続爆破事件後に、逮捕されたインドネシアのジハード暴力集団は 2014 年までに 700 名以上いるが、小規模の事件の発生はジハード暴力運動の粘り強さを示している。そして同時にテロ容疑で受刑した人物が出所することで、更にジハードを煽るケースもある（例えば JAT に参加したアマン・アブドラフマンやウベイドの例）。2013 年から 2015 年までに出所したテロ犯は 88 名である（この中には 2002 年バリ島連続爆破事件で逮捕された 36 名が含まれる）。

この時期に発生したのが、シリアとイラクの内戦の勃発と、2014 年

6月末にカリフ制樹立が発表された「イスラム国」による闘争だった。「イスラム国」の樹立は、インドネシアのジハード暴力グループがその運動を拡大できる新しい機会を与えた。例えば、同年7月2日に獄中のバアシル導師は「イスラム国」に対し忠誠を誓った。また、インドネシア当局の2015年1月の発表によると、「イスラム国」に同調して参戦したインドネシア人は123名であり、その渡航のアレンジの一部は受刑中のテロ犯を通じて行われていた¹⁷。

7 おわりに

本稿では、インドネシアにおけるジハード暴力グループをテーマに、実行するテロ行為をジハード暴力グループがその目的をアピールできる手法としてみて分析した。テロは、社会心理的に存在する欧米への反感、抑圧されるイスラム教徒への同情心、などの需要に対し、ジハード暴力グループ（テロ・ネットワーク）が自らを供給できる運動手段であるが、その運動の効果は、社会に広範に広がるようなものではなく、第4グループに限られる限定的なものである。しかし、継続する数々のテロ事件とその背景を見ると、テロという手法は、限定的であるが根強く一部の集団に強いアピールがあることが分かる。直近では、「イスラム国」に対するインドネシア国民の支持は、需要の部分で説明した第1、第2のグループからは全く無いといってよく、第3のグループの例で挙げたインドネシア解放党も「イスラム国」はイスラム教徒を殺害する暴力集団であるため不支持を表明している。さらに、インドネシア政府も「イスラム国」を違法化している。ただ、既に100名以上（500名という報道もある）のインドネシア人が「イスラム国」に同調し渡航して参戦していることも事実である。その思想的背景には、ジハードを正当化する社会心理的な需要が少しでもあり、その実行を強く促す教えと、インター

ネットでの映像でアピールする運動が一部で成功している事実がある。それはまるで、ジハード暴力の巧妙なマーケティング戦略の成功であり、それはテロ・ネットワークが供給できるジハード暴力運動の重要な要素である。

需要と供給を繋げ、ジハード暴力運動がテロという手法で、その運動をインドネシア社会で拡大できるとは現状では見えないが、その行方を左右するのは、政府を含め需要側がテロ事件に対しどのような対応取るか、そして供給側がどのように自らを売るか、そしてその需給プロセスのなかでテロという手法がどのような正当性を獲得していくかにかかっている。テロという手法だけをみても理解できないプロセスであるので、同時に社会環境（支持する社会と標的になっている社会の両方）とジハード暴力グループの変貌に注目していく必要がある。

参考文献リスト

- 河野毅 (2005)、「東南アジアおよびインドネシアのイスラム過激派」、私市正年 (編)『現代イスラームをめぐるテロリズムの背景と現状』Sophia AGLOS Working Papers Series No.7, pp. 3-34.
- Bergen, Peter (2012), *Man Hunt: The Ten-Year Search for Bin Laden from 9/11 to Abbottabad*. New York: Crown Publishers.
- Coll, Steve (2008), *The Bin Ladens: An Arabian Family in the American Century*. London & New York: Penguin.
- Hellmich, Christina (2011), *Al-Qaeda: From Global Network to Local Franchise*. London: Zed Books.
- ICG (International Crisis Group), “How Indonesian Extremists Regroup,” *Asia Report No. 228*, 16 July 2012.
- _____, “Indonesia: The Dark Side of Jama’ah Ansharut Tauhid (JAT),” *Asia Briefing No. 107*, 6 July 2010.

_____, “Indonesia: Jihadi Surprise in Aceh,” Asia Report No. 189, 20 April 2010.

IPAC (Institute for Policy Analysis of Conflict), “The Evolution of ISIS in Indonesia,” IPAC Report No. 13, 24 September 2014.

_____, “Indonesians and the Syrian Conflict,” IPAC Report No. 6, 30 January 2014.

_____, “Weak, Therefore Violent: The Mujahidin of Western Indonesia,” IPAC Report No. 5, 2 December 2013.

Jemaah Islamiyah (1993), Pernyataan Resmi Al-Jammah Al-Islamiyah. (JI の設立公式声明) (出版社不明)

_____(1995), Pedomannya Umim Perjuangan Al-Jama’ah Al-Islamiyah. (JI の闘争大綱) (出版社不明)

Lia, Brynjar (2009), Architect of Global Jihad: The Life of Al-Qaeda Strategist Abu Mus’ab Al-Suri. New York: Columbia University Press.

Solahudin (2013), The Roots of Terrorism in Indonesia: From Darul Islam to Jema’ah Islamiyah. Ithaca: Cornell University Press.

van Stekelenburg, Jacquélien, Conny Roggeband, and Bert Kländermans, eds (2013), The Future of Social Movement Research: Dynamics, Mechanisms, and Processes. Minnesota: University of Minnesota Press.

¹ Steve Coll, *The Bin Ladens: An Arabian Family in the American Century* (London & New York: Penguin, 2008).

² Peter Bergen, *Man Hunt: The Ten-Year Search for Bin Laden from 9/11 to Abbottabad*, (New York: Crown Publishers, 2012), pp. 221-230.

³ Christina Hellmich, *Al-Qaeda: From Global Network to Local Franchise* (London:

需給関係の狭間で揺れ動くインドネシアのジハード暴力運動

- Zed Books, 2011).
- 4 Jacquelin van Stekelenburg, Conny Roggeband, and Bert Klandermans, eds., *The Future of Social Movement Research: Dynamics, Mechanisms, and Processes* (Minnesota: University of Minnesota Press, 2013).
 - 5 河野毅、「東南アジアおよびインドネシアのイスラム過激派」、私市正年(編)『現代イスラームをめぐるテロリズムの背景と現状』(Sophia AGLOS Working Papers Series No.7, 2005) pp. 3-34.
 - 6 Jemaah Islamiyah, *Pernyataan Resmi Al-Jam'ah Al-Islamiyah* (JIの設立公式声明) (N/P, 1993).
 - 7 Jemaah Islamiyah, *Pedoman Umum Perjuangan Al-Jama'ah Al-Islamiyyah* (JIの闘争大綱) (N/P, 1995). 特に第3、4段落。
 - 8 Solahudin, *The Roots of Terrorism in Indonesia: From Darul Islam to Jema'ah Islamiyah* (Ithaca: Cornell University Press, 2013), pp.192-196.
 - 9 ICG (International Crisis Group), "Indonesia: The Dark Side of Jama'ah Ansharut Tauhid (JAT)," *Asia Briefing* No. 107, (6 July 2010) : 3.
 - 10 *ibid.*, 4.
 - 11 ICG (International Crisis Group), "Indonesia: Jihadi Surprise in Aceh," *Asia Report* No. 189, (20 April 2010): 1-2.
 - 12 *Ibid.*, 12-13.
 - 13 ICG (International Crisis Group), "How Indonesian Extremists Regroup," *Asia Report No. 228*, (16 July 2012).
 - 14 ICG, "Indonesia: Jihadi Surprise in Aceh," (20 April 2010): 13.
 - 15 Brynjar Lia, *Architect of Global Jihad: The Life of Al-Qaeda Strategist Abu Mus'ab Al-Suri* (New York: Columbia University Press, 2008).
 - 16 IPAC (Institute for Policy Analysis of Conflict), "Weak, Therefore Violent: The Mujahidin of Western Indonesia," *IPAC Report No. 5* (2 December 2013): 11.
 - 17 IPAC (Institute for Policy Analysis of Conflict), "Indonesians and the Syrian Conflict," *IPAC Report No. 6* (30 January 2015): 15-16.

河野 毅

Indonesia's Violent Jihad Movement in its Supply-Demand Relations

KOHNO Takeshi
Professor, Faculty of Social Sciences
Toyo Eiwa University

Acts of terror violence (as “supply”) are one of the movement methods used to appeal to the social environment (as “demand”) in order to achieve a political goal. In this paper, I place Indonesia's terror group Jemmah Islamiyah (JI) and its terror violence as supply, and analyze whether its terror activities appealed effectively to the Indonesian social environment. In order for JI to appeal effectively to the Indonesian social environment, JI needs to choose the most effective methods. In this analysis, JI had not been successful in appealing to Indonesian society, let alone reaching its ultimate political goal of establishing a caliph system in Southeast Asia. This paper first explains the social environment by categorizing four Islamic social groups such as secularists, modernists, fundamentalists, and jihadists. In spite of many terror acts, JI was split into different groups as it failed to appeal to the social environment for support. However, the establishment of Islamic State (ISIL) has provided a new social environment in Indonesia. Hundreds of self-professed fighters from Indonesia have gone to join the group to fight, and the eventual return of these fighters may result in increase of terrorism.